

日本ペスタロッチャー・フレーベル学会 関西地区研究会  
平成 22 年度 第四回課題研究院会・近畿地区議事録

日時；平成 22 年 12 月 18 日（土）13 時～17 時 30 分  
場所；龍谷大学深草校舎 紫英館 2F 第四共同研究室会  
参加者；宍戸健夫、松川礼子、劉蓮蘭、田岡由美子、澤田真弓、  
藤井恵美子、石川道夫  
欠席者；浅野俊和、荘司泰弘、酒井玲子、柏原栄子、

[研究会の主旨]

2009 年秋スタートの日本 PF 学会の課題研究は、テーマを「子育て支援」とすることになった。従来、どちらかという教育理論、教育史的な研究に重点を置いてきた本学会が、時代や社会が求めている重要な課題に取り組んでいくという画期的な研究テーマであり、2012 年に政府が予定している幼保一元化を見据えて「子育て支援」の在り方を学会としてどのように提言していくかを課題としている。

1. 研究報告

○宍戸健夫「子育て支援 これまでとこれから」

I 児童虐待が、増加し続けている

- ・児童虐待が増加している。総数は、平成 17 年の 34,472 件から平成 21 年度は 44,211 件。0 歳から 3 歳未満が、8,078 件と多く、0 歳の 67 件の内、64 人が死亡。0 日でなくなっている子がかかりいる。こうした事態に立ち至るケースは、妊婦検診を受けず、母子手帳の交付を受けていないことが多い。また、一歳児検診、三歳児健診で病院に来た時もチャンスだと言われる。北海道では、5,000 人以上がこうした検診を受けていないというニュースもあった。子育て支援の節目は、母子手帳を取りに来た時である。シングルマザーか経済力はあるのかを知ることもできる。
- ・2010 年 7 月、大阪市西区で起きた 1 幼児遺棄死事件は、象徴的なケースだった。3 歳と 1 歳の乳幼児の母は、23 歳のシングルマザーで、子どもたちを生んだ当時は名古屋在住で、生々していた。事件当時は、子どもたちをマンションに放置して、自分はそこに近づかず飛び歩いていた。近所の人達が気づいて、児童相談所に通報、指導福祉士が 3 回訪問するも、鍵がかかっている子どもたちが中にいると分からず帰っていた。こうした 3 歳未満児の虐待事件の増加が、近年顕著である。

II 子育て支援は、いつ頃、どうして出てきたのか

- ・子育て支援は、1994 年 12 月、文部省、厚生省、労働省、建設省の 4 省の合意文書と

して「今後の子育て支援のための施策の基本方向について(エンゼルプラン)」を少子化対策として発表したのを切っ掛けとして始まった。200年7月、少子化対策基本法と次世代育成支援対策法が制定され、これに基づいて「次世代育成支援行動計画」が策定された。これの前期計画が、2010年3月までだったので、その総括書を各都道府県が出している。

### III エンゼルプランの内容

- ・エンゼルプランの主な内容は、①保育システムの多様化・弾力化の促進（駅型保育、在宅保育サービス）②低年齢児、延長保育、一時的保育事業の拡充 ③保育所の多機能化のための整備（相談指導、子育てサークル支援など）④放課後児童対策の充実 ⑤乳幼児健康支援デイサービス事業 ⑥幼稚園就園奨励事業の推進 ⑦子育て支援センターの整備など。これらは国の予算が伴っている事業で、⑤は主として障がい児に対するサービス事業である。

### IV 今日の子育て支援を考える

- ・児童相談所は、相談活動の中核であり、児童相談所の下に各地区の自動化亭支援センターが設置されている。保健所は、相談、検診、乳幼児の訪問指導、療育活動などの役割を担当。他に、保育所、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設（母子寮）、知的障害児施設、重症心身障害児施設、児童厚生施設、児童自立支援施設、児童家庭支援センター（児童相談）などの児童福祉施設。家庭的保育事業、子育て支援事業、放課後児童健全育成事業（学童保育）などの子育て支援事業がある。
- ・ただしいずれも国の補助金等が続く限りはできるが、それがなくなると困難。なかでも子育て支援事業、学童保育などの事業は、財政基盤が最も弱体なものの中にある。

### V 最近の児童虐待をどう考えたらいいのか

- ・「要領」「指針」では、「家庭との連携」を重視するとともに、「地域の資源を積極的に活用する」ことを支持している。保育所は、親からの相談を適切に受け止めていく上で、大きな役割を果たしているが、その一方で相談活動の中核は児童相談所であり、相談所との連携を深めることも必要である。指導相談所での虐待相談の受付件数は、年々増え続けている。なかでも実母による虐待が多く、被害者は就学前児童がその半数を占めている。その背景としては、小家族・核家族時代の中で、母親が相談相手もなく、孤立し、ストレスを増大させていることが考えられる。

### VI 3歳未満児を持つ母親の意識－「3歳児神話」（今では神話扱いではあるが）

- ・平成18~20年の科研費研究「乳幼児保育における母性意識の国際比較」では、日本、中国、アメリカ、スウェーデンの保育者、乳幼児の母親を対象に3歳までに母親が子

育てに専念しないと後の発達に影響があるかどうかについて質問した。保育者は、スウェーデンでは、62%が当てはまらないと答えたが、日本、アメリカは 22%、39%、中国は 2%だった。日本は、「どちらともいえない」と答えたものが、33%おり、4カ国のなかでも最も多い。母親もスウェーデンが、「あてはまらない」と答えたものが66%と最も多い。日本は、「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」を合わせて32%、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」が38%、「どちらともいえない」が31%であった。中国は、「あてはまる」が54%あったが、これは3歳未満児のための施設がほとんどないということに合わせて、マスコミが早期教育のブームを作り出していることもある。

## V 保育所、幼稚園の役割を考える

- ・保育所、幼稚園でも子育て支援活動を展開しているにも関わらず、児童虐待は減どころか、増加している。その理由の根源には「貧困」があるという指摘がある。母親の働く条件を保障するために、保育園の低年齢児の枠が拡大され、幼稚園の預かり保育も広がっている。また「認定こども園」として再編成される動きもある。厚生労働相は、児童福祉法の改正で、「保育に欠けるものを入所させなければならない」を「家庭的保育事業などそれに代わるものを提供しなくてはならない」と改正した。しかし、家庭的保育事業を実施する保育ママは増えず、認可園がそれに代わる事業を資格保育者とパートで運営する動きもある。

### ○松川礼子

「スウェーデンの子育て支援と幼児の環境教育プログラム『ムッレ教室』について」

- ・2010年8月17日~26日の10日間、スウェーデンのストックホルムに滞在し、就学前学校（1975年、スウェーデンでは幼稚園、保育園を一括して直訳すると就学前学校となる表現に呼称を変更した。このプレスクールが学校教育の壺番の基礎とされる。幼稚園をスクールとし、プレスクールが幼稚園前を意味するカナダのような例もあるので、ここは敢えて就学前学校とする）、オープン保育室（日本の地域子育て支援センターに類似した機能のもの）、地域子どもヘルスケアセンター、ムッレボーイ就学前学校等を訪問した。現地で撮影した写真を紹介しながら、1歳~6歳児の野外活動主体の就学前学校・森のムッレ教室を中心に報告する。
- ・スウェーデンは、人口約935万人、そのうちストックホルムに83万人が居住。この国では世界で最も女性の就業率が高く、男性も女性も子育ての両立が当然のこととなっている。従って男性の育児休暇取得率も80%以上。宿泊したユースホステルに隣接した公園にも育児中の父親と子どもの姿があちこちで見られた。見学した就学前学校では、子どもたちの1グループ15名あたりに部屋が4~5部屋あり、これに先生2人

と高校生くらいのアシスタントが1人ついていて、子ども1人あたりの最低基準面積は、9.5㎡で、日本の4倍位になる。部屋は当然寝食分離、コーナー遊びの部屋、アートスペースといった使い分けがされている。こうした就学前学校は、働く親のためだけでなく、子どもの権利として位置づけられている。待機児童は、親が入所希望をして3ヶ月以内の入所が自治体に義務付けられている。住宅の近くに就学前教室があり、子ども5人に1人の保育者の配置、医療と教育の連携の他に驚くべきことは、ラッシュアワーが4時半台だったことである。つまり、家族団らんに関わらずということである。ここにスウェーデンの子育て支援が世界一と言われる所以がある。

- ・今回の視察の第一の目的は、ストックホルム市郊外のリディング市にあるムッレボーイ就学前学校（Mulleborg Förskola）を訪問することであった。ここはスウェーデンで最初に幼児のための環境プログラム「ムッレ教室」を日常的教育プログラムとして取り入れた民間教育施設である。
- ・入り口には、「ムッレボーイ 雨の日も晴れた日も」の表札と「すべての子どもは野外に出る権利がある」と書かれた横断幕がある。園舎の脇を通って裏庭に出ると、大きな岩山があり子どもたちがよじ登ったりしている。大きな木々に囲まれた園庭は、茂みや起伏に富み、陶芸小屋や三角屋根の丸太小屋があり、丸太小屋はおやつを食べたり、昼寝をしたり多目的に使われているようである。保護者手作りの小石を張った幅1m、長さ20mほどの水路もあり、夏には水遊びを楽しむとのこと。畑では野菜が栽培され、隅にコンポストが置かれていた。
- ・見学した5歳から6歳児のクラスは、その日は12名の子どもに保育者が2名。我々は、コーディネーターの高見幸子さんを含めて5名で見学。子どもたちは長靴にレインコートを着て、リュックの中には雨具や防寒具、そして当日は野外で食事の日だったようでおやつとお弁当も持参で、園から坂道を15分ほどの森、ブルーベリー山へ出かけた。
- ・岩穴の前で保育者が立ち止まり、「ムッレは留守のようね？」そして、おもむろに葉っぱを拾うと「手紙があるわ。なんて書いてあるのかしら？」「ムッレは水上スキーに行っています」と女の子。こんな風にファンタジーの世界に子どもは引き込まれていく。おやつの前には、布の上で人形を使ったお話、続いて草花ゲーム。これは途中で見つけてきた草花を保育者がひとつずつ子どもと一緒に名前を確かめながら、白い布の上に広げ、もう一枚の布で一旦上から隠して、再び開いたときに、草花の名前を当てるというゲームで、集中力や記憶力を使って、草花の名前を覚えていくという遊びである。歌やゲームやお話を楽しみながら子どもたちは五感を研ぎ澄まし、さまざまな身の回りの自然の理解を深めていく。しかも、こうした子どもたちは、病気で休むことも怪我をすることも少ないという。

- ・幼児のための環境教育「ムッレ教室」は、1957年に野外生活推進協会の事務局長だったヨスタ・フロムと小学校の自然教育の専門家だったスティーナ・ヨハンソンが自然教育プログラムとして開発したもので、既にスウェーデンでは50年以上の歴史がある。「森のムッレ教室」は、5~6歳児を対象に子どもの心と体の発達に応じたプログラムで、2010年8月現在で207ヶ園の就学前学校と16の小学校で取り入れられている。既に200万人以上の子どもが「ムッレ教室」を体験し、これはスウェーデン人の4~5人に1人の割合になるという。
- ・この「ムッレ」という森の妖精は、フィンランド語では「トルル」にあたり、スウェーデン語での「土壌」(Mullen) からきている。子どもたちにわかりやすく森の中で守らなくてはならないこと、自然を大切にするというメッセージ伝えるシンボルで、5歳から6歳の子ども向けのキャラクターで、1~2歳にはクノッペン(木の芽)、3~4歳にはクニュータナー(ちびっこちゃん)、学齢期の子どもにはストローパレという自然の階段が用意されている。このような森の教室は、北欧諸国の他にイギリス、ドイツ、レバノン、ロシア、日本など10カ国以上に広がっている。
- ・日本では、1990年に高見幸子さんが、初めてムッレ教室を紹介、現在は高見さんのお兄さん、高見豊さんが日本の野外生活推進協会の会長として、日本全国でリーダー養成講座を開催し普及に努めている。2010年10月に開催されたCOP10では、東京市部が中心となり、新潟支部と共にブースを出して、『スウェーデンからの贈り物—幼児のための環境保育「ムッレ教室」』と題して環境教育の重要性を訴えた。(スウェーデンの育児休暇制度、両親保険、就学前制度などについて統計数字を出して詳細なレポートがあったが、煩瑣になるので省略させてもらう。)

○次回は、3月26日(土曜)13時から、今回に引き続き龍谷大学の田岡先生に会場の方をお引き受け願うということになった。報告者としては、柏原先生、浅野先生にお願いしてみることにする。

書記 石川道夫